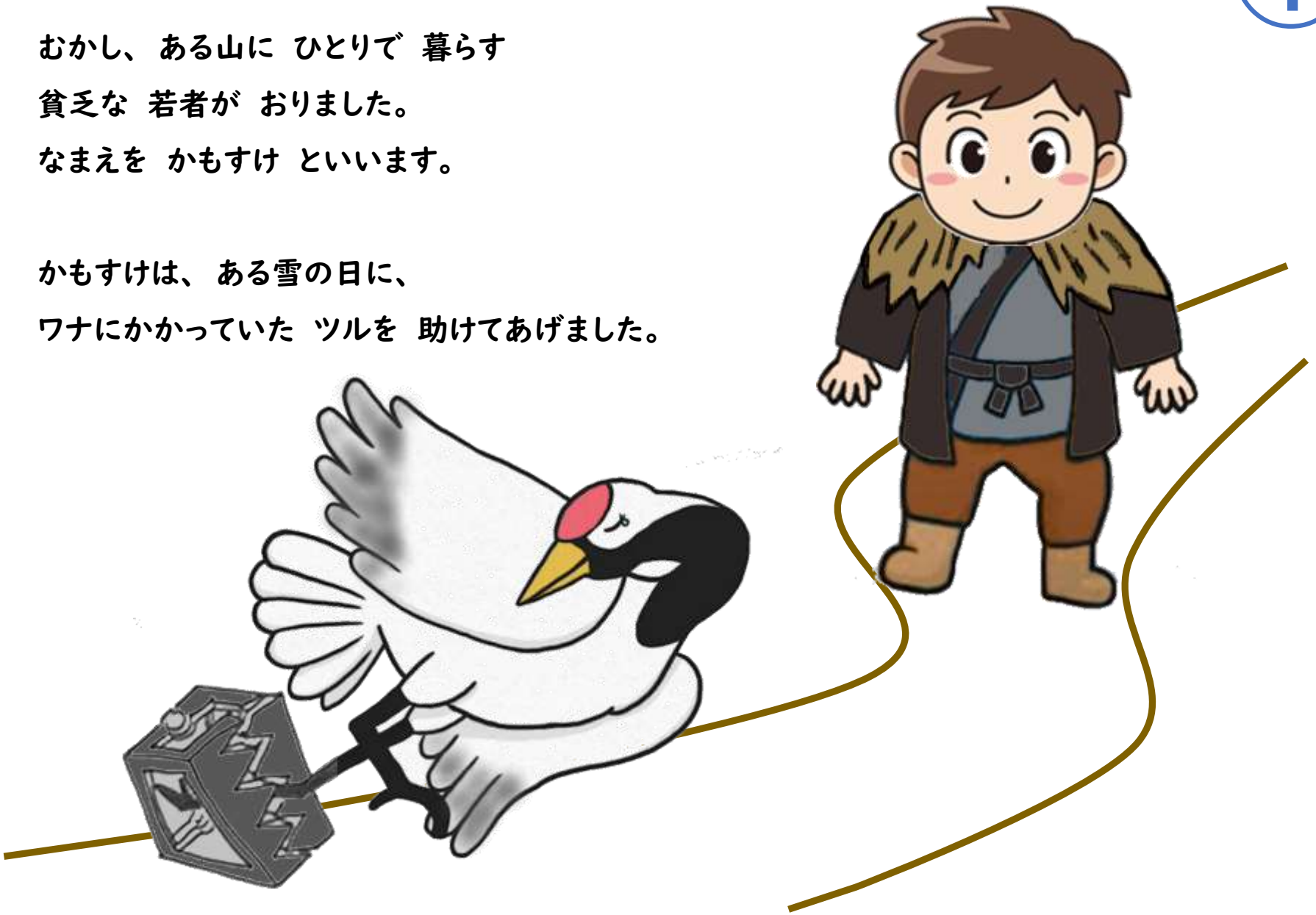
うちは、つるちゃうねん

つるの恩がえしやて…

そんなんしらんけど

むかし、ある山に ひとりで 暮らす
貧乏な 若者が おりました。
なまえを かもすけ といいます。

かもすけは、ある雪の日に、
ワナにかかっていた ツルを 助けてあげました。



その日の夜、

かもすけの家に　女の人が　訪ねてきました。

「雪で　困ってます。どうか　ひと晩　泊めてください。」

かもすけの家に、

女の人が　訪ねてくるなんて、

はじめてのことです。

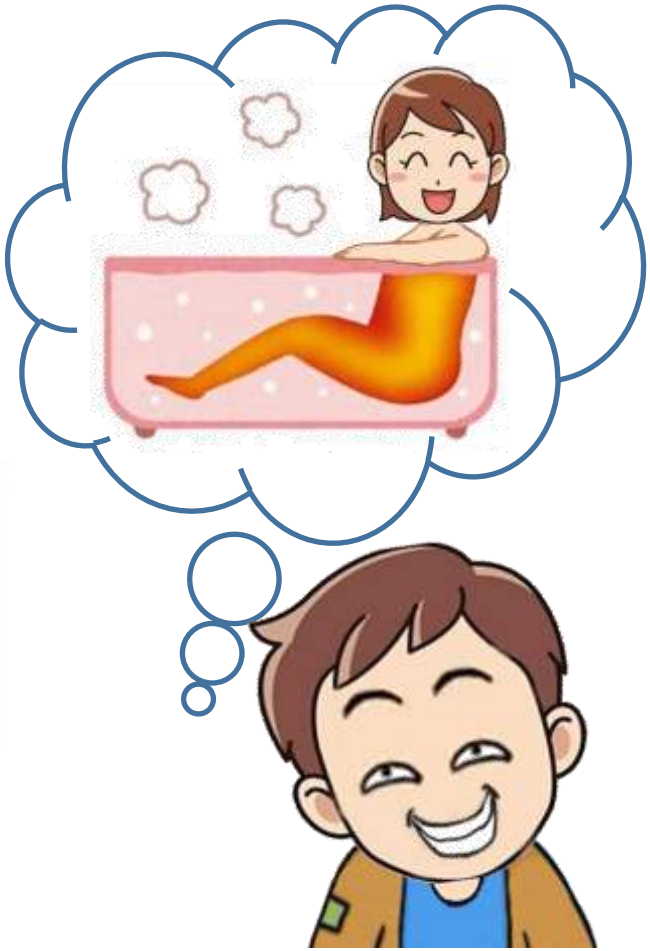
かもすけは、うれしくなり

もし　よかったら　ひと晩といわず、

ずうっと　いっしょに　暮らせないかと　お願いしました。

かもすけは、 女の人のために うでによりをかけて、
ごはんを作り、 お風呂も 用意しました。

かもすけは、 どきどきしながら
女の人が お風呂から あがるのを 待っていました。



かもすけは、 女の人と 楽しく 話しをするのは はじめてです。

夜も 遅くなりました。
かもすけは、 女の人の 手をにぎり
「あの～ そろそろ 寝ましょうか？」 っといいました。

女の人は、 ほほを 赤くして、
親切な人 どうか わたしを
お嫁さんに してください。
そして これからは、
おつると 呼んでください。
っと いいました。

それを聞いた　かもすけは、

まいあがり

その日から　おつるに　夢中になりました。

おつるを　お嫁さんにした

かもすけは　しあわせでした。

ある日、 かもすけは 冷静になって 考えました。

ひょっとして、

おつるは、 ワナにかかっていた ツルなんじゃないのかなぁ

でないと、

こんなところに お嫁になんか くるわけがない。

もし そうだったら、

恩がえしに たんものを 作ってくれるかもしれない。

「部屋を見ないで、」っていわれたら、 絶対に 見ないでおこう。

むかし話しの　展開を　知っていた　かもすけは、
恩がえしより、
おつると　いっしょにいたいと　思っていました。

かもすけは、　しあわせでした。

「おつるのため　だったら
　なんでも　してあげるよぉ…」

そういって、
いっしょうけんめいに　働きました。

おつる…

もう　寝ようよぉ…

かもすけが、　おつるを　誘っているとき、

おつるが　いいました。

そろそろ　たんものを　織りたいのですが、

ここには、　はたおり機は　あるのですか？

かもすけの家には、　はたおり機などは　ありません。

あっ、　そうか　…

それで、　おつるは　恩がえしが　できないんだ。

かもすけは、　おつるに

「たんものなんか　作らなくていいよ。」

「何もしなくて　いいから…

　この家を　出て行かないでね。」

っと、いいました。

それを　聞いた　おつるは、

本当に　何もしなくて　いいの？

それじゃ、

「これからも、何もしないね。」

それに、

「いまから　この部屋で、生活するわ。」

だから、

「けっして、部屋の中を　のぞかないでね。」

そういって、

おつるは、 部屋に とじこもりました。

かもすけは、 これって むかし話しの展開？。

「部屋を のぞかないで…」って、

言われたけど

ちょっと、 展開がちがうなぁ…

でも、 部屋を のぞいてしまうと

おつるは いなくなってしまうので、

絶対に、 見ないようにしよう。

その日から、

かもすけは、 寂しく ひとりぼっちで 寝ることになりました。

寂しくなった　かもすけは、
部屋を見ないけど、
音だけ　聞いてやろう　と思い
耳を　たてました。
部屋から　バリバリといった　音がします。

つぎの日も
部屋から　バリバリといった　音がします。

おつるは、
はたを　織っているのかなぁ…

さらに、数日が 経ちました。

おつるのことが

恋しくなった かもすけは、

とうとう 部屋の中を のぞいてしまいました。

そこには、

太った　おつるが、　おかしを　食べていました。

バリバリ　といった音は、

せんべいを　食べていた　音でした。

おつるは、 かもすけに いいました。

うちは、 つるにも 人間にも
化けることが できるけど、
かわいい 女の人に 化けるのは、 疲れるねん。

だから、
部屋の中に とじこもったんやけど、

こんな姿を 見られたからには、
もう お別れや…。

お別れって、
おつる…　恩がえしは、しないんかぁ～
お前は、あのとき　助けた「つる」なんだろう。

でも　恩がえしは、
もう　いいから　いっしょに　暮らして　ほしいねん。

おつるは、いいました。
わたしは「人間に化けれるの…」
でも、
かわいく　化けるのは　疲れるの…

最後の恩がえしに、もう一回
かわいい女の人に　化けて　あげるわ。

それに、
わたしは、「つる」 じゃないのよ。

それから、
おつるは、 なぜか 大阪弁になりました。

どうでも ええことやけど、
うちは「さぎ」やねん。
だから 首をまげて 飛ぶねんで、

首をのばして とぶのが、「つる」やでぇ…
忘れんと 覚えときやぁ…

うちは、

「つる」ちゃいまんねん 「さぎ」でんねん。

もぅ〜 さいならやぁ…

「こんババ」で、堪忍やでぇ…

「おつる～」

戻って きてくれぇ 、 お願いやぁ… 戻って きてくれぇ…

べつに、

かわいく化けなくても いいから…

ひとりは、 寂しいねん。

：

エッチ したいねん。

：

それに、

「こんババ」って、 なんやねん…

それから 数日が 経ちました。

もう おつるは 戻ってこないんや…

こんなとこに、 おったらあかん。
人生は、 楽しくないと あかんのや…
そして、 お嫁さんも 探すんや…

いまから 旅にでるんや ！

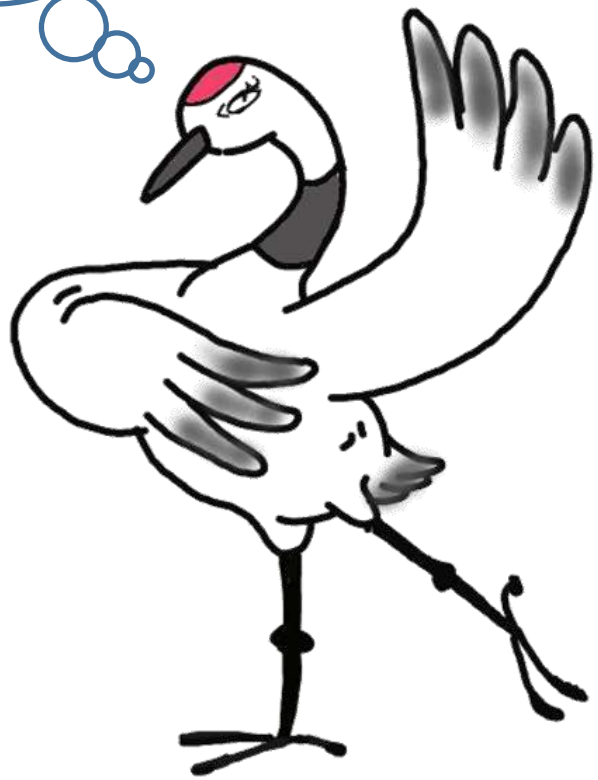
だけど、 なんで 大阪弁やねん。

おしまい

おまけ

うちの根性が、 ババ色やてぇ…
でも、
人生は、バラ色やけどなぁ…

知らんけど！



「こんババ」って言うのは、
根性が ババ色のことで、 性格が悪い という意味やでぇ
大阪では、 うんこのことを 「ババ」って言うんや…

最後に、 忠告や
女の人の かわいい顔に、 ダマされたら あかんでぇ…

それと、「なにもしなくていい」とか、
「なんでもしてあげる」とか、 言わない方がええでぇ…